

主の降誕 夜半のミサ

ルカ 2・1-14

2018.12.24 18:00

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今晚わたしたちは大変な寒さの中、クリスマスミサのためにここに集って来ました。ここに集うためにわたしたちが身を晒した寒さが、わたしたちが祝っているクリスマスを一層引き立てているようにも思えます。何故かと言うと、わたしたちが身をもって感じるこの寒さが、クリスマスの祝いの中心に向かって一層わたしたちの心を引き付けるからです。クリスマスの祝いの中心には、この祭壇の前に置かれた幼子イエスのご像が象徴する、インマヌエルとなってわたしたちの世界にそのお姿を示してくださった神の愛の暖かさが息づいています。クリスマスが告げているこの神の愛の暖かさに魅かれて、その暖かさを求めてわたしたちはここに集っているのです。クリスマスの祝いの中心には、わたしたちが自分たちの手で作り出すのではない暖かさがあります。クリスマスの夜、わたしたちの世界にその愛のぬくもりをもたらすために生まれ出てくださった神の愛の暖かさに身も心も凍てつくようなこの現実の中に生きるわたしたちが包みこまれることこそがクリスマスの祝いを祝うということです。クリスマスがもたらす、わたしたちの手で作られるのではないこの神の愛の暖かさに真実包み込まれるとき、わたしたちは、わたしたちよりもはるかに過酷な状況の中でクリスマスを迎えた人々とともにこのクリスマス祝うことが出来るのです。

いつの間にか、わたしたちの心の中に定着しているかもしれないクリスマスの暖かなムードは、わたしたちが外の世界を忘れて、自分たちだけでその中にヌクヌクとしているとするなら、クリスマスによって神がわたしたちに伝えようとしたことを台なしにしてしまうかもしれません。クリスマスはその初めから、この世界の最も過酷な状況の中で、その暖かな光を輝かせ続けてきたのです。身を寄せる宿もなく、寒空のもと、やむなくベツレヘムの馬屋に人の世の生を受けた神のいのちが、クリスマスのわたしたちへのメッセージの中心です。それぞれの時代の過酷な状況の中に生きた人々の心を、クリスマスはこの中心に向かって、すなわち、秣桶に眠る乳飲み子の姿において示された神のいのちへと招き続けて来たのです。クリスマスはその初めから、この世界の現実の歴史を生きる人々とともにあったのです。そのようにして、わたしたちが生きる

この現実の世界に、神の愛そのもののいのちがわたしたちとともに息づいていることを示し続けて来たのです。

聖書が語る最初のクリスマスがそうであったように、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た嬰兒が指し示す、このわたしたちの現実の中に息づいている神のいのちの神秘は、今もこの世界に生きる多くの人々には知られないままです。何故なら、この世界の現実の中に生きるわたしたちは、わたしたちに押し迫ってくるその圧倒的な力の前にその現実からの出口を求めて、そのことだけに狂奔しているからです。しかし、今晚ここに集ったわたしたちはそのような現実を生きる今のわたしたちの中にも、あの最初のクリスマス以来、神のいのちが息づき続けていることにあらためて心の目を向けるように招かれてここに集っているのです。

クリスマスは、このわたしたちの現実の世界の歴史の中に、神のいのちが生まれ出たことを祝う祭りです。このクリスマスをそれを伝えて来たキリスト教の信仰の立場に立って祝うわたしたちは、この世界の現実を生きる自分たちの中に流れる人間としてのいのちが、クリスマスにおいて示された神のいのちに結ばれていることを意識しなければなりません。クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た神のいのちは、わたしたちが生きる現実の世界のいのちと同じいのちを共有することによって、そのいのちがどこから来たものであるかをわたしたちに示そうとしているのです。このクリスマスの神秘を信仰をもって受け止めることが出来る時、わたしたちは、自分たちが生きるいのちが、クリスマスの嬰兒が示しているように、神から来たものであることを受け入れることが出来るのです。そしてこれこそが、この現実の中で迎えたクリスマスがわたしたちにもたらす、最も貴重な恵みのメッセージ、福音であるのです。

クリスマスは、わたしたちが現実を生きることにのみこだわって、隅に追いやってしまってきた、そしてその結果、いつの間にか忘れてしまっていた、わたしたち一人ひとりが生きるいのちの尊さをわたしたちに思い起こさせるためにあるのです。わたしたち一人ひとりが生きるいのちは、この現実の世界の中では、はかないものです。それゆえに、涙がこぼれるほどに、抱きしめたいほどに、いとおいしいものです。他の誰にとってよりも、わたしたち全ての者のいのちの源である神にとってそうなのです。わたしたちのうちに流れるいのちのいとおいさを抱きしめるために、神はあのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に人となって、わたしたちが生きる現実の世界に来てくださったのです。神はそのようにして、放っては置けないわたしたちに対して新たな絆を結んでくださったのです。

2018年の今年の漢字には災いという漢字が選ばれたことは記憶に新しいことではないでしょうか。いつにもまして自然災害が多かった一年でした。あの東日本大震災以来、「いのちの絆」というキャッチフレーズにわたしたちは心に向けて来ました。けれども、平成の時代が過ぎ去ろうとしている今、わたしたちは、わたしたちの心を惹いたこのキャッチフレーズが、心から遠ざかってゆくことを恐れなければなりません。この現実の世界を生きるわたしたちは、常に新しいキャッチフレーズを必要としているからです。そのようにして、わたしたちの心のうちに常に思い巡らし続けなければならない、これほどの人々の犠牲の上にわたしたちが得たはずの貴重な経験をも、忘却という蔵の内にしまいこんでしまうことを警戒しなければならないのです。

そのためにこそ、わたしたちはこの平成最後の年の暮れにあたって、クリスマスのミサをささげているのです。クリスマスこそが、わたしたちにとって、神がその身をもって示してくださった「いのちの絆」の原点だからです。神は、わたしたちの現実の世界に、「いのちの絆」のかけがえのなさを回復し、それを決定的に示すために、人となってベツレヘムの馬屋のお生まれになったのです。そのお方をかたどる幼子イエスのご像が安置された祭壇の前に頭を垂れて、わたしたちの心に去来する全ての想いがそのお方に結ばれて、わたしたちの祈りとなるよう願いを込めて、このクリスマスのミサをともにおささげしたいと思います。